様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

2012 年　6 月 22 日 現在

機関番号：３１３０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009 年度　～　2011 年度
課題番号：２１５３０１８５
研究課題名（和文）　日本社会科学の 1920 年代　――日本資本主義論争前史の文献的研究

研究課題名（英文）　1920's social science in Japan ―― A bibliographical studies concerning the prehistory of controversy of Prewar Japanese Capitalism

研究代表者
大和田　寛（OWADA HIROSHI ）
仙台大学・体育学部・教授
研究者番号：31077026

研究成果の概要（和文）：従来、戦前期日本の経済思想・社会思想の研究は、1930 年代の日本資本主義論争を中心に行われてきた。しかし、1919 年には東京・京都の両帝国大学で経済学部が独立する一方、民間の大原社会問題研究所が創設され、また『我等』や『改造』といった雑誌も創刊される。これらの研究機関が活発な研究活動を開始し、これら雑誌がその成果を載せ始めるのが 1920 年代である。また新潮社の『社会問題講座』といった所謂「講座」が刊行され、上記の研究成果が一般に普及していくのも、この時代である。今まであまり注目されなかったこれら雑誌・講座を分析し、この時期が 30 年代前史以上の位置づけをなされるべきであることを確認した。もっとも、雑誌等の資料蒐集に時間を取られたことと、3・1 大震災によって、その成果は不十分であると言わざるを得ない。

研究成果の概要（英文）：Up to now, studies of economic thought or social thought in prewar Japan ware almost the theme concerning Japanese Capitalism controversy in 1930s. By the way the College of economics became independent of the college of law at TOKYO UNIVERSITY and KYOTO UNIVERSITY in 1919.In same year, OHARA private Institute of social problem research was founded in Osaka. The magazine WARERA and KAIZOU and so on ware published in 1919,too. Many papers as the result of Inquiry at these research facilities were actively carried on these magazines in 1920s .And in these days many KOUZA which was several books gathering of any issues and subjects were published . SHINCHOSHA 's KOUZA of social problems also carried many papers of social scientists.

We studied bibliographically these unknown publishing of magazines and KOUZAS. We came to a conclusion that 1920 s study of economic thought or social thought in 1920s was not prehistory of study of controversy of Prewar Japanese Capitalism.
It has an independent scientific importance.,

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,500,000	450,000	1,950,000
２０１０年度	600,000	180,000	780,000
２０１１年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：経済学・　経済学説、経済思想

キーワード：
経済思想史、日本資本主義論争、1920 年代、大正デモクラシー

１．研究開始当初の背景
（１）戦前の日本経済思想史・社会思想史の研究が、1930 年代中心であったこと、また 20 年代についても河上肇研究に力点が置かれていて、それ以外はあまり研究されていなかった。
（２）　1920 年代はまた大正デモクラシーの時代であるが、大正デモクラシー思想史として、吉野作蔵・美濃部達吉・長谷川如是閑の政治思想は取り上げられ、一定程度解明はなされていると言える。特に吉野作蔵の研究は多い。しかし当時の経済学や経済学者（例えば、福田徳三・森戸辰男）らは、大正デモクラシーに対して、いかなる思想・理論で対応したのか、については言及されることが少ない。この両者の関係についても、まだまだ解明されることはあろう。
（３）上記の大正デモクラシー史研究の視点からも、当時の社会科学の状況と、それをどのように一般大衆に伝えたか、またそれを大衆はどのように受け止めたかも、大きな論点と思われる。特に、20 年代に入ると円本ブームに象徴されるように、当時の雑誌・書籍（特に、講座・全集・叢書もの）が大衆に広く流布し影響を持ち始めるのであるが、その雑誌・書籍そのものに立ち入った研究はほとんどなされてこなかった、という実態があると言えよう。

２．研究の目的
（１）1920 年代を、1930 年代の日本資本主義論争の前史としてではなく、日本の経済学・社会科学の創成期として、その独自性を明らかにする。そのためにも、河上肇以外の経済学者にも光を当てる必要がある。その意味で、大原社会問題研究所に所属する研究者たち、すなわち高野岩三郎とその弟子たちを、分析の対象とすることが必要である。
（２）1920 年代は、河上肇に代表されるように、マルクス主義・マルクス経済学の導入・受容の時期でもある。しかし、その導入・受容の意味・内容は多様である。例えば、この時代の経済学者として、河上と並び称される福田徳三も、マルクス経済学に大きな影響を受けたひとりである。しかし彼は、マルクス経済学を相対化し、生存権の思想を唱えた。彼の経済学の思想史的解明（マルクス経済学の受容の仕方等）も、1920 年代研究の課題のひとつである。
（３）また当時の大正デモクラシーと社会科学・経済学との関係を考える意味でも、この時期に急増する、一般大衆を啓蒙した雑誌・出版物に注目したい。代表的な雑誌としては、河上の個人雑誌『社会問題研究』のほか『中央公論』『改造』『我等』『解放』といった有名なものから、現在では忘れ去られた、例えば『社会科学』（改造社刊）にも着目したい。またいわゆる「講座もの」「叢書」では、新潮社の『社会問題講座』や誠文堂の『社会科学講座』、さらには、日本評論社の『社会科学叢書』などがある。これらの雑誌・講座・叢書で、現在では、忘れ去られたといえるもの（後半のもの）を中心に、その内容・歴史的意義を確定する。

３．研究の方法
（１）河上肇以外では、大原社会問題研究所の所員たち、とくに森戸辰男及び権田保之助に注目している。森戸は、この時代に社会科学というものを最も意識した学者で、権田は、社会の実態から入っていくタイプで、民衆娯楽の分析を社会科学的におこなった。ある意味で、二人は師である高野岩三郎の持つ両極のそれぞれの一面を継承する社会科学者であるといっても過言ではないであろう。両者の著作を集め、その思想内容と社会科学の発想を問題とする。
（２）上述の如く、福田徳三は河上肇とそして高野岩三郎と並ぶ、20 年代を代表する経済学者であり、吉野作蔵らと黎明会を作り、啓蒙活動も行っていて、河上とは全く違った意味で著名であるが、河上と同様、膨大な著作群を残している。彼もマルクス・マルクス経済学に大きな関心を示しているが、その理解は大きく異なる。そのことを分析しながら、彼の生存権の思想を考察する。
（３）すでにみたように、雑誌としては社会科学』（改造社刊）、「講座もの」では、新潮社の『社会問題講座』や誠文堂の『社会科学講座』、そして「叢書」としては『社会科学叢書』（日本評論社）について歴史的なコンテクストを踏まえ、書誌学的な分析をおこなう。

４、研究成果
（１）上記の３つのテーマを中心にして、相互に関連付けながら研究を進めてきたのであるが、取りあえず論文として提示できたのは、三つ目の論点の、当該期の雑誌、講座の書誌的考察の概要だけである。さらにその詳細な考察については草稿段階であるが、ある程度書き進めている。
（２）また、大原社会問題研究所の研究員である森戸辰男についても、研究を進め原稿も書き進めているが, 校了に至っていない。私見によれば、森戸は、1920 年代に高野を受け継ぎながらも、さらにそれを発展させかなり独自な社会科学観を作り上げていく。しかし

その点は従来あまり評価されてこなかったと言える。それには、森田の戦後の経歴（学者としてよりも政治家としての経歴、例えば文部大臣とか中教審の会長等）が、彼の真の評価を妨げる障害となっていると思われる。後の思想や経歴でそれ以前の研究や業績が、評価されるのが、思想史研究において全く間違った方法であることは言うまでもない。

また、森田もまた福田徳三同様、生存権の思想を強調するが、しかしそれは、福田のそれとは、まったく同じではないが、その点の考察は十分にまとまっていない。

なお、当該期の「社会科学」と言う言葉は、『マルクス主義』のことだとする見解が、かなり広く流布していて通説となっているともいえるが、私見によれば、それは間違っている。森戸にしても高田保馬にしても、1920年代前半までは、本来の社会の科学という用語法で使っているように思われる（高田には、社会科学とついた論文が多数存在することも、その傍証となろう）。それがマルクス主義のこととして用いられるのは,いつ頃のことか、その時期や根拠についても、別途考察しなければならない。

（３）また本研究にとって、総論に当たる大正デモクラシーと当該期の経済思想・社会思想の関係について、考察する必要を感じ、その原稿も準備を始めていたが、まだ終わってはいない。いずれも研究が不十分な状態で、この科研費研究の期間を終わることになってしまったのは、勿論私の能力に余る過大なテーマを掲げた、私自身の見通しの甘さであり、その点は十分反省しなければならない。

しかし、3 年目にはある程度まとめることができると考えていた、その矢先の２年目の年度末、つまり 2011 年 3 月 11 日の全く予想だにしなかった大震災について、言い訳ではなく言及せざるをえない。

私自身は、仙台市内の比較的中心部に住んでいて海岸からは遠く、津波の被害は免れたものの、マグニチュード９、０の未曾有の大地震によって、家中の書架のほぼ全てが倒壊するに至った。研究テーマとして歴史的な・書誌的な研究に従事しているため、また全く私の専門からは遠い分野の大学（体育大学）に勤めているために、大学の図書館にほとんど頼ることができない。そんなこともあって、個人としては比較的多い蔵書を有している。正確な数は不明であるが、専門外の文学書・一般書を含めて５万冊以上の書籍（その中に約１万冊の雑誌を含む）を有している。そのほとんどを納める書架が倒壊したために、その整理・復旧のためにその後のほぼ１年（科研費研究期間の最後の３年目の１年）を費やすこととなってしまった。

勿論、所属する大学（の研究室）および学生の被害、そして親戚・友人・知人の甚大な被害（死亡・行方不明）も相当あり、精神的なストレスを含めて、研究どころではない、また自分の本の片付けどころではない、といった状況が長機関続いたことは言うまでもない。

この結果、３年目には完成するはずであった幾つかの論文が未完成に終わった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 大和田寛、1920 年代におけるマルクス主義の受容と社会科学文献、大原社会問題研究所雑誌、617 号、2010，54－66、
② 久保誠二郎、翻刻『日本マルクス主義文献』Web 版の公開に寄せて、大原社会問題研究所雑誌、617 号、2010，25-53、

〔学会発表〕（計３件）

① 大和田寛、1920 年代の社会科学文献、マルクス・エンゲルス研究者の会、2010 年 3 月、鹿児島大学
② 久保誠二郎、「内容見本」から見る改造社版及び連盟版『マルクス・エンゲルス全集』の構成と変化（附論　翻刻『日本マルクス主義文献』Web 版の紹介）、マルクス・エンゲルス研究者の会、2010 年 3 月、鹿児島大学
③ 久保誠二郎、『日本マルクス主義文献』と大正・昭和初期のマルクス・ブーム、経済学史学会、2011 年 11 月、京都大学

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
久保誠二郎　翻刻『日本マルクス主義文献』（web 版）

６．研究組織
(1)研究代表者
大和田　寛　(OWADA HIROSHI)
仙台大学・体育学部・教授
研究者番号：30177026
(2)研究分担者
川村哲也　(KAWAMURA　TETSUYA)
神奈川大学・経済学部・准教授
研究者番号：60367258

久保誠二郎　(KUBO SEIJIRO)
東北大学・大学院経済学研究科・博士研究員
研究者番号：80400216

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：